

1. コラム「論点提起」：言葉の軽さと解釈概念の幅や如何

最近、「言葉/用語」が軽い、雑である、使う意味合いが違うのでは、と感じることが多い。

例えば、「レジリエンス Resilience」。自然災害対策の一環として、「国土強靱化 National Resilience」という用語が普及しているが、ハード重視と誤解される「強靱化」では、レジリエンスの本来の意味合いを表現できていない。分野、手法に依らず、事前の予防力と事後の回復力を含意する状況変化に応じた「適応力」こそが「レジリエンス」の日本語訳に相応しい。

そして、「イノベーション innovation」。未だに使われる「技術革新」という日本語訳の流布が、「イノベーション」本来の「新たな結合による社会・経済的価値の創造的破壊（＝新たな価値創造）による行動変容・市場変容をもたらすこと」という概念から遠ざけている。その背景に、OODA時代になっても、疑念なくいつまでも「PDCA」を「PdCa」的に使い続けることがある。

（参考：なぜか日本人は「PDCA」を「PdCa」にしてしまう…日本企業が残念な失敗を繰り返す根本原因
2023/02/27 PRESIDENT Online <https://president.jp/articles/-/66571?page=1>）

最近では、「〇〇トランスフォーメーション/OX」いう用語が巷に氾濫している。本質が深く理解されることなく使われている。例えば、「DX (Digital Transformation)」。本意は、デジタルを活用した社会・ビジネス構造の変革にあるが、手段である「デジタル化」が目的化したかのような誤った解釈による使い方が流布している。なんでも「〇〇トランスフォーメーション/OX」である。振り回される側にも問題がある。（参考：経産省も反省する「2025年の崖」の顛末、SIerを肥え太らせた偽りのDXの行方 2023.02.20 日経XTECH <https://tinyurl.com/2qfu8gjj>）

何故、そういう事になったのか。精神科医の和田秀樹氏は、「日本人の多くが、大学生のときは『教授の言う通り』、会社に入ってから『言われた通り』であるため、新しいことに挑戦するときに使う『前頭葉』が鍛えられていない」という。（出典：「考えない日本人」だらけになった日本企業の末路 イノベーションが生まれなくなった根本原因 和田秀樹 2022/12/18 東洋経済ONLINE <https://toyokeizai.net/articles/-/639460>）

この真逆として、「本居宣長」が古事記を何十年も読み解き続け、ようやく「もののあわれ」（しみじみとした深い感情）という日本人の美意識を表す言葉の理解にたどり着いたことを知る。

（知恵泉 <https://tinyurl.com/2javqxcw>）。解説の千崎彰容（日本大学教授 日本思想史）の「心が動くことが起きてから言葉にしたい衝動が出てきて言葉って出てくる」。別の番組（カンブリア宮殿 <https://tinyurl.com/2m97x8kw>）で、ニューバランス Japan 社長が、日本人社員の行動変容を促すため、「つま先を踏まない」をあえて「つま先を踏む」と指針表現したことを、村上龍は「言葉が精神を変える」と評していた。さらに、歌人の俵万智の短歌づくりにおける言葉探しの呻吟をみる（プロフェッショナル <https://tinyurl.com/2r33v2r5>）。それぞれに言葉を扱うプロ、思想を扱うプロである。言葉に対して深い理解・解釈という「責任」を感じる。

今一度、「言葉」について深く考えてみたいものだが、軽い社会の世相を変えられるか如何。